



	2024-15 2024-29
監督: グオ・ファン	
製作・原作: 劉慈欣 (リウ・ツーシン) 『流転の地球』	
出演: 吳京 (ウー・ジン) / 劉德華 (アンディ・ラウ) / 李雪健 (リー・シュエチエン) / 沙溢 (シャー・イー) / 寧理 (ニン・リー) / 王智 (ワン・ジー) / 朱顏曼滋 (シュ・ヤンマン ツー)	

👁️👁️ みどころ

1980 年代に、「中国映画ここにあり」を全世界に発信したのが張芸謀 (チャン・イーモウ) 監督の『紅いコーリャン』(87 年) (『シネマ 5』72 頁) だったが、その原作は、2012 年にノーベル文学賞を受賞した莫言の同名小説だ。

それに対して『三体』で 2015 年にアジア人作家初のヒューゴー賞の長編小説部門を受賞した SF 作家が劉慈欣 (リウ・ツーシン) だ。そんなリウ・ツーシンの短編小説『流転の地球』が映画化されたのは当然だが、その第 2 部たる本作がついに日本でも公開。これは必見！

『流転の地球』とは何とも恐ろしいタイトルだが、2058 年には月に異変が起き、地球に墜落するという危機が訪れるらしい。その後も次々と危機が迫り、100 年後には太陽系が消滅。そんな馬鹿な？ それに対処するために地球連合政府が立案した『移山計画』とは一体ナニ？ 『ディープ・インパクト』(98 年) では、同じような設定の地球の危機に対して、米国大統領が冷静沈着なリーダーシップを発揮していたが、本作で「移山計画」を指揮するのは誰？ また、核保有国からかき集めたありったけの核兵器を月面に運び込み、設置し爆発させるという大変な任務に挑むのは一体ダレ？

吳京 (ウー・ジン) 主演の本作が中国で、『戦狼 2』(『シネマ 41』136 頁) に続いて大ヒットした理由を含めて 173 分という長尺になった本作の今日的意義をしっかりと考えたい。

■□■原作に注目！中国で SF ブームが大爆発！映画化は？■□■

中国の SF 作家、劉慈欣 (リウ・ツーシン) の長編 SF 小説『三体』は、アジア人作家としてはじめて、2015 年の第 73 回ヒューゴー賞の長編小説部門を受賞し、世界的に大ヒッ

ト！同作は、「地球往事」三部作の第一作で、日本語版は2019年7月4日に発売されたため、私も早速購入した（が正直読めてはいない）。

他方、劉慈欣の短編小説『流転の地球（流浪地球）』は、2000年に中国のSF小説雑誌『科幻世界』に掲載され、日本では、『S-Fマガジン』2008年9月号に『さまよえる地球』の邦題で日本語版が掲載された。そして、『流転の地球』は2019年に実写映画として中国で公開され、大ヒット！日本の劇場での一般公開はされなかったが、Netflixで配信されたそう。『三体』の方も、映画化はされていないが、中国ドラマとして制作され、日本でもWOWOWで放送・配信されたのち、U-NEXTでも配信されたそう。また、2020年にはNetflixが地球往事三部作のドラマシリーズ製作を発表し、2024年3月21日に配信予定らしい。

そんな状況下、中国で公開された『流転の地球』の第2部たる本作は、2024年3月22日から、日本の劇場で公開されることが決定！私は早速、オンライン試写で鑑賞したが、こりゃすごい、こりゃ必見！2019年に公開された第1作の『流転の地球』もすごいタイトルだったが、そのシリーズ第2弾たる本作のサブタイトル「太陽系脱出計画」も、一見して「なるほど」と納得できるが、よく考えると、これもすごい計画だ。

■□■「宇宙エレベーター」の高さは？その乗組員は？■□■

本作冒頭、地上と宇宙ステーションを繋ぐエレベーターが映し出される。1960年代の日本では東京タワーが、また21世紀初頭の日本ではアベノハルカス等の300mを超える超高層ビルが最高の高さだったが、本作冒頭に見る、宇宙エレベーターは何万キロも上空に昇っていくものだから、桁違いの地球上で最も高い施設だ。

旧約聖書の「創世記」第11章に登場する「バベルの塔」を巡ってはさまざまな説があるが、一般的には、「人類が塔を作り神に挑戦しようとしたため、神が怒って塔を壊した」と解釈されている。バベルの塔の物語は、「創世記」第6～9章の「ノア方舟」の物語と並んで有名かつ壮大な物語だが、現実にはバベルの塔の高さは何メートルだったの？それに比べれば、本作に見る地上と宇宙ステーションを繋ぐエレベーターの高さは、まさに桁違いだ。本作冒頭では、その宇宙エレベーターに乗り込む、選抜された優秀な訓練生として、リウ・ペイチアン（呉京／ウージン）らが登場するので、それに注目！本作ではまず、この宇宙エレベーターでの移動風景に注目したい。

■□■壮大な世界観！米国に追いつき追い越せの意気込みが！■□■

ジョージ・ルーカスが製作し、1977年に公開された『スター・ウォーズ』は、世界中で爆発的な人気を呼んだ。そして、後に『エピソード4／新たなる希望』と改題されるオリジナルの映画『スター・ウォーズ』（77年）を皮切りに、『エピソード5／帝国の逆襲』（80年）、『エピソード6／ジェダイの帰還』（83年）の旧三部作と、『エピソード1／ファントム・メナス』（99年）（『シネマ28』未掲載）、『エピソード2／クローンの攻撃』（02年）、『エピソード3／シスの復讐』（05年）（『シネマ8』121頁）の新三部作が生まれ、更にジ

ジョージ・ルーカスが制作会社をウォルト・ディズニー・カンパニーに売却した後も、『エピソード 7/フォースの覚醒』（15 年）（『シネマ 37』未掲載）、『エピソード 8/最後のジェダイ』（17 年）（『シネマ 41』未掲載）、『エピソード 9/スカイウォーカーの夜明け』（19 年）（『シネマ 46』未掲載）の続三部作が製作された。これらの 9 作品は、「スカイウォーカー・サーガ」としてシリーズの柱となっている。

このように、『スター・ウォーズ』シリーズの壮大な世界観は 50 年近くにわたって世界を席捲し続けてきたが、今や軍事的にも経済的にも「米国に追いつき追い越せ」状態になっている中国発の『流転の地球』シリーズは、映画界において、それを目指していることが明らかだ。

■太陽系が消滅？地球政府はいかなる対応を？■

本作によると、2044 年には地上と宇宙ステーションを結ぶ宇宙エレベーターが崩壊、2058 年には月に異変が起き始め、地球に墜落するという危機が訪れ、さらに、2078 年には引力により地球と木星が衝突するという危機が訪れるらしい。すると、100 年後の地球は？300 年後の地球は？1995 年に阪神淡路大震災、2011 年に東日本大震災を体験した日本では、当面来るべき首都直下型大地震と南海トラフ地震が大問題だが、地球の消滅、さらには太陽系の消滅という事態になれば、その何千倍、何万倍の大惨事に？

スティーヴン・スピルバーグ製作総指揮、ミミ・レダー監督による『ディープ・インパクト』（98 年）は、同年に公開された、マイケル・ベイ監督、ブルース・ウィリス主演の『アルマゲドン』（98 年）とよく似た内容の面白いパニック映画だった。両作に共通する設定は、地球に隕石もしくは彗星が衝突するというもの。『ディープ・インパクト』では、そんな“地球の危機”に対応して、アメリカとロシアの合同作戦として、宇宙船メサイア号で彗星に乗り込み、核爆弾で彗星を破壊するという「メサイア計画」が立ち上げられ、その搭乗クルーたちが大活躍！しかし、「メサイア計画」が失敗した後は、モーガン・フリーマン扮するアメリカ大統領が強烈なリーダーシップを発揮しながら、第 2 作戦となる、核ミサイルでの迎撃による「タイタン作戦」、さらにその失敗に備えて各国が「ノアの方舟」となる地下居住施設を建設していることを公表するという、困難な任務を遂行していた。

それに対して、本作で、そう遠くない未来に起こり得る“太陽系消滅”という危機に備えて地球連合政府内でリーダーシップを発揮しているのは、中国代表のジョウ・ジョウジー（リー・シュエチェン/李雪健）だ。地球連合政府が、『ディープ・インパクト』の「メサイア計画」や「タイタン作戦」、「ノアの方舟」に代わって、始動させている巨大プロジェクトは、「移山計画」。これは、一万基に及ぶロケットを使って、地球を太陽系から離脱させるという巨大プロジェクトだが、同計画の可否は？成否は？

■デジタル技術で死んだ娘を甦らせることができるの？■

去る 1 月 6 日に観た『シャクラ』（23 年）では、1980 年代の若手イケメンスターだった甄子丹（ドニー・イエン）が今や同期仲間のトップとしてカンフー・アクションに励んで

いた。劉徳華（アンディ・ラウ）は彼とほぼ同期で、カンフー映画の常連だが、若い頃は歌手兼イケメンスターとして張學友（ジャッキー・チュン）、郭富城（アーロン・クロック）、黎明（レオン・ライ）と共に四大天皇と呼ばれて一時代を築き、その出演映画数は100本を超えている。そんなアンディ・ラウが、本作では、禁断のデジタル技術によって、事故死した娘を甦らせようとする量子科学研究者トゥー・ホンユー役を演じている。しかし、そんなことって可能なの？

生成AIの技術が飛躍的に進んでいる現状を考えれば、近い将来それも可能性ありかもしれないが、そもそも「量子科学」とは何かが分かっていない私には、ホンユーが何を目指し、何をやっているのかがサッパリわからない。もちろん、173分の長尺になった本作では、ホンユーのさまざまな活動が、死んだ娘のデジタル映像と共に（？）に詳しく描かれるから、その方面に理解力のある人はその展開をじっくり楽しみたい。しかし、私のように、その方面にチンプンカンプンの人は、ホンユーのストーリーを少し省略しながら鑑賞しても、なお十分楽しむことができるので、しっかり173分間を楽しみたい。

■核爆弾の有効活用に注目！リウは月面で何を？■

近時、日本では、小型探査機ハヤブサの活躍が報道され、さらにH3ロケットの打ち上げが成功したことが報道されている。日本は、そんな小さなプロジェクト（？）で、大きな役割を果たしているが、1万基のロケットを使って地球を太陽系から離脱させるという、巨大プロジェクトたる「移山計画」の元になるエネルギーは核だ。2022年2月24日に始まったウクライナ戦争は今かなりやばい状況になっているが、欧米からの武器支援が”小出し”になったのは、ロシアによる核兵器使用の恐怖からだ。1950年代の米ソ冷戦が終結していく中で、両大国が保有していた核兵器の縮小が進められたが、ソ連崩壊後は逆に、中国、フランス、イラン、北朝鮮等の核保有が進むにつれて核兵器は増大し、そもそも核保有国がそれぞれどれくらいの量の核兵器を保有しているのか自体が不明になっている。それが2024年の今の世界の現状だ。

しかし、2058年の本作では、当初の実験を成功させた「移山計画」を本格的に始動させ、地球存続の命運を「移山計画」の成否に託すについては、すべての核保有国から供出される核兵器を、地球に近づいてきている月面に埋め込み、それを一斉に爆発させることによって月の軌道を移動させることが不可欠だ。そんな困難な任務を一体誰が実行するの？それが本作のリウの役割だから、それに注目。リウは今、多くの仲間たちと共に月面への旅に臨んでいたがその困難はいかばかり！

中国で大ヒットした『戦狼2』（17年）（『シネマ41』136頁）（『シネマ44』43頁）でも、ウー・ジンは、クライマックスで中華人民共和国のために大活躍していたから、それはきっと本作でも同じ！本作におけるそんなクライマックスは、あなた自身の目でしっかりと！

2024（令和6）年3月7日記